

あんげろす

還暦と世俗宗教

鍛冶 智也

母校の大学から卒業生の「伝道献身者の集い」の案内が届いた。第4回目の開催ということで、前回までは「一仕事成した高齢の方の集まりでしょ？」と感じて欠席していましたが、私自身もアラカン（アラウンド還暦の略、嵐寛寿郎世代という意味ではありません。それはもっと上の世代）になったので、参加することにした。伝道献身者といっても、法学部政治学科という俗世の学科に属して、地方自治（最近では痴呆ジジイ）という分野で研究と教育をしている身で、ゼミ生がキリスト者になったのが両手に余るぐらいで「伝道」はおろか「献身」にも身に覚えがないのですが、宗教部長時代にちょっと暴れたのが発覚したのか、と恐れ怯えています。

改めて考えてみると「暦が還える」こととは、知恵と技術が継承され、よみ還えることをあらわしています。例えば、出雲大社が60年で遷宮するのは、宗教的な意味合いは別として、宮大工の高度な知恵と技術の継承をぎりぎりの年限で確保するためです（マヤ文明のピラミッド築造にかける還暦は52年ですし、社会資本の最長耐久年限は50年）。人の寿命を考慮すると、遷宮の準備期間が相当であると想定して、60年毎の蘇生再誕というのは合理的な判断でしょう。そうすると世俗（大工）の知恵と技術の継承こそが、神聖な宗教性の継承を保障してきたということになります。もともと宗教は敬虔で神聖だったわけではなく、世俗の信仰に起源を有すると捉えてみると、世俗宗教という表現は一種のトートロジーなのかもしれません。私のような世俗分野の研究・教育者が、敬虔な献身者の集いの片隅に招かれるのは、宗教の本質なのかも、と慰めている次第です。ただ、還暦の教師として、高度な知恵と技術を次世代に確実に継承できているのか、というと覚束なく、「神にもすがら」思いになっております。

かじ・ともや（所員）

第92号

2023年12月



「じゃなかしゃば〜^{もだ かせ}悶え加勢する
コミュニティ〜」

岡田仁

牧師になる以前、九州の水俣に五年ほど住まわせてもらったことがある。1990年当時、おもな水俣病裁判はすでに終結し、最も汚染された水俣湾を埋め立てる大規模な浚渫工事が約五百億もの大金を投じて行われていた。いまでは「美しい」公園に様変わりしているが、そのすぐ傍の水俣湾・百間排水口の樋門が「老朽化」を理由にいま撤去されようとしている。「水俣病原点の地」ともいうべきこの排水口は、工場がメチル水銀を含む排水を無処理のまま海に流し、水俣病を発生させたことを今に伝える重要な歴史遺産に他ならない。

この百間排水口に集まり、亡くなった被害者たちの魂を弔っていたのが、「天の魚」の一人芝居を演じた俳優・砂田明であった。作家の石牟礼道子や患者とその家族、支援者たちとともに参加者の多くがご詠歌を唱えるなか、筆者にもその場でキリスト教の祈りを捧げるよう声をかけてもらった。

石牟礼道子とは水俣で数度お会いしたが、彼女の「悶え加勢する」との言葉を知ったのは最近である。おのれの無力さに打ちひしがれる一人の支援者に彼女はこう語ったという。「ああ、あなたは悶え加勢しているのですね。昔は悶え加勢するということが、水俣ではよく有りよりました。(略)人が悶え苦しみよらすとき、あたふたとその人の前を行ったり来たり、一緒になって悶えるだけで、その人は少し楽になる。」

(『みな、やっとの思いで坂をのぼる』)

水俣で砂田明から最初に聞いた言葉が「じゃなかしゃば」という水俣特有の方言だった。これは「そうじゃない娑婆」、つまり近代社会のような人と人、神と人、自然と人とがギスギスしている関係とは違う、もう一つ別のオールターナティブな社会という意味とのことで、哲学者の花崎皋平は「民衆の希望の祈り」だといった。水俣病の爆心地・百間排水口での宗派を超えたあの集いは、

まさに「じゃなかしゃば」を希求する者たちの切なる祈りであり、戸惑いうろたえつつも公害被害者とその家族に寄り添い、向き合おうとする人々の「悶え加勢する」決意そのものではなかったか。

主イエスがガリラヤ湖でシモン・ペトロに「人間をとる漁師にしよう」といわれたのは、悶え苦しむ人を前にあたふたと行ったり来たりしながらも、一緒になって悶える人として仕え、寄り添って話を聴かせてもらう者として出かけていきなさいという宣教命令の教えなのではないか。教会は一方的に上から目線で教えるのではなく、主イエスがそうであられたように、苦しむ人の場にわが身を置き、下からの視座に立ちつつ悶え加勢する、そのような祈りの共同体ではなかったのか。もしそうであるならば、ここに今日の教会が目指すべき方向があるように思えてならない。一人ひとりが苦しみ呻吟する者と共に悶える関係が築かれるとき、希望の祈りの共同体が生まれるのかもしれない。

水俣病とは何であったのか。水俣病の原因は有機水銀であり、それを大量に海に流し続けたチツソである。しかし、そのもっとも根本的かつ大いなる原因は「人を人とも思わない状況」、換言すれば人間疎外、人権無視、差別といった、今日に続く状況であろう。これが、1960年から水俣にかかわった医師・原田正純の結論であった(『水俣が映す世界』)。原因企業チツソも行政も、人としての責任を果たそうとしなかった。その根底にあるのが「人を人とも思わない」という差別的な論理であり、公害の原因がここにある。

2023年9月27日、大阪地方裁判所は、原告である患者全員への救済責任を果たせとの画期的な判決をくださった。しかし、この判決を不服とした国と県、チツソはすぐに控訴した。水俣病公式確認から今年で67年。高齢の被害者が救済される日はいつのことであろうか。しかし、望みを捨ててはならない。最後の一人が救済されるその日まで、「じゃなかしゃば」の祈りが絶えることは決してない。その日を信じて、悶え加勢するひとりでわたしも

あり続けたい。

おかだ・じん（協力研究員）

「面倒」という宗教性

池田昭光

都内のある私立大学で非常勤講師をした時、教室では近代とイスラームをジェンダーの視点から論じた著作を教材に用いた。受講者は二名で、いずれも女性だった。

ある日、何かのきっかけで、イスラーム教徒の結婚に話が及んだ。改宗は必要なのかという彼女たちの質問に対して、仏教徒の女性がイスラーム教徒の男性と結婚する場合は改宗を求められるだろうと筆者が述べると、受講者の一人がおおよそ次のようなことを言った。

（私は）イスラーム教徒と結婚するのはかまわない。だけど、ベールをかぶるとかかぶらないとか、考えないといけないのは嫌だ。

なんとも不思議な言い方ではないだろうか。非イスラーム教徒の女性がイスラーム教徒の男性と結婚するときは改宗が必要だと、筆者が情報提供し、件の学生はそれに対して、結婚するのは問題ないという風に自身の姿勢を示したのだから、それは改宗も問題ないことを意味するのかなと思いきや、そう単純ではないらしい。一体どういうことだろうか。実をいうと、そのとき筆者はこの言に対してなんとコメントしてよいかわからず、なぜそう思うのかと掘り下げることもないまま、なんとはなしに授業の本題に戻ってしまった。今になって思うと非常に興味深い発言であり、少々悔やんでいる。よって、ここからは筆者の想像も交えた理解になる。

とはいえ、何かひねった解釈を導こうというのでは

ない。ごく単純に学生の発言を言い換えると、

宗教を信じる人との結婚はしてもよいが、そのことで私が当該宗教について事あるごとに自身のコミットメントを問われるのは勘弁願いたい。

ということになるだろうか。おそらくポイントは、配偶者の宗教について自分自身がどうかかわるべきか、その都度知り、考え、選ぶ行為がわずらわしく感じられるという感覚である。日本語でいう「面倒（くさい）」がもっとも適切な表現だろうと筆者はうけとめている。しかも、このような感覚はおそらくこの時の受講者に特有のものではないとも認識している。よって一般化して、多くの日本人が抱く宗教性の根幹には「面倒」の感覚が伴うと言い切ってみたい。

筆者は文化人類学の授業を長年担当してきたが、様々なトピックのなかでも特に、いつも教育につまずくと感じられるのは宗教である。文化人類学的には、クリスマスや初詣の実践も充分宗教とみなされると教えても、結局のところほとんどの学生が「自分たちは神道であれキリスト教であれ、本当に信じているわけではない」という一点に回帰する。何をどう工夫しようと、「本当には信じない私（たち）」なる言明が岩のように立ちはだかり、異文化を通じて自身を振り返るといった教育的試みが粉々になってしまうのである。

この厳然とした宗教性（アイデンティティと言ってもよい）が「自分たちは何々である」ではなく「何々でない」という否定形で常に表明されるのは興味深い。おそらくこの点が「面倒」という回避の姿勢と通じ合う気がしている。そうであれば、これは「強い」し、「手ごわい」だろう。「何々である」形式ならば、別の何かと代替しうるが、「何々でない」という形式は、その気になればあらゆる代替可能性を否定

し、「そうではない」と永遠に言い続けられるからである。件の学生は、配偶者の宗教が「何々でない」形式と共存可能ならば構わないが、そこを「破壊」（おそらく当人にはこう感じられるのではないだろうか）して自分自身を「何々である」形式に作り替えるならばそれは拒否する。筆者は現時点で、この教室でのエピソードを以上のように理解している。

おそらく文化人類学に限らず、どのような分野であれ学問は基本的には「何々である」形式をとりながら多くの事柄を説明するだろう。中には「何々でない」形式をとることもあろうが、その場合であっても、最終的には「何々である」形式に帰着することがほとんどではないかと思われる。そうでなければ私たちが「納得」するのは難しい。

だが、もし日本人の宗教性が「何々でない」形式にもとづいているのだとすれば、「何々である」形式でそれを理解し、まして相対化に導くのは非常に困難と予想される。いわば両者は永遠にすれ違うからである。しかし、ここをどうにかして「翻訳」したり「説明」したりできなければ、学問が本当の意味で自分たちの理解に触れてくるようには思われぬ。果たして筆者の専攻する文化人類学がこの任に堪えうるか、いささか心もとなく感じている。

いけだ・あきみつ（所員）

雑録

尊敬する友を亡くした。勉強出版の社長として敏腕を振るい、2018年にひとり出版社であるみずき書林を設立した岡田林太郎さんが、今年の7月3日に他界した。2021年の夏の終わりに発覚したスキルス胃がんとの2年近い闘病生活であった。享年45歳の若さだった。

2022年11月末、約1ヶ月の苦しい入院生活を終えて在宅療養を始めた岡田さんに、医師は余命1、2ヶ月と告

げた。私を含め周囲はそれを覚悟していたが、告げられた本人は、入院中は意識も混濁していたこともあり、予期が十分でなかった分、絶望も深かったのだと思う。退院から2週間を経て余命についてみずから伝えてくれた時の表情は忘れることができない。涙ながらに「これではもう何もできない」と語る彼に即座にかけられる言葉はなく、まずは穏やかに新年を迎えて欲しいと切に願うほかなかった。

ところがその後、岡田さんは医師や看護師が驚くほどに復調し、読書や音楽を楽しむ気持ちも湧いたようだった。好きだった村上春樹の新刊が2023年4月に出ることを知ると、刊行を楽しみにするようにもなった。仕事の多くはすでに信頼できる他社へと手放していたが、10年前から一緒に温めていた出版企画を実現すべく、研究会にも再び参加してくれるようになった。

その岡田さんに、同じくひとり出版社であるコトニ社の後藤享真さんが、本を書きませんかと提案した。岡田さんはそれを快諾し、創業以来、投稿が1,200件を超えるみずき書林のブログ(<https://www.mizukishorin.com/blog>)の内容に基づく書籍の執筆に取り掛かることになった。創業時の健康であった自分が綴る、新たな出発の興奮さめやらぬ文章をみずから再読し、病を得た5年後の自分の言葉を重ねてゆく。あるいは病を公表し、将来に対する不安に苛まれた時期の苦しい文面を読み返し、数度の入院を経た未来の自己の立場から、過去の自己を見つめ、思うことを綴ってゆく。

2023年5月末、再び入院することになった岡田さんは、次第に体調が悪化するなか、病床にあってスマートフォンのフリック入力で「あとがき」を書き上げた。こうして完成した書籍は、岡田林太郎『憶えている 40代でがんなったひとり出版社の1908日』(コトニ社)として、11月に刊行された。総525頁の読み応えのある一冊となった。

2023年11月25日、私の主催する研究会「近代日本の日記文化と自己表象」の第38回を特別回として実施し、

『憶えている』を題材に取り上げることにした。追悼の意味を込めながら、ブログという日記的文章に基づき、それを再読して自己語りを重ねるといった書籍の内容は、個人文書を取り扱う研究会の主題としてふさわしい。思い出語りはもちろん自然に交わされるとしても、客観的にテキストとしてどう読むか、という一点を担保する狙いがあった。生前に岡田さんと交流があった方々はもちろん、面識のないみなさんも多く参加くださり、想像を超える盛会となった。ご親族もご参加くださり、主催した身としてはありがたかった。

こうして沢山の言葉を遺してくれたおかげで、残された者は故人のことをいつでも思い出し、語りあうことができる。もちろん記憶は忘却と表裏一体であり、忘れたくない意思と、忘れてしまうことへの恐れは、時の経過から生まれる一つの感情の別名でもある。

しかし今後は、残された者がこの書を読み、憶えていること、思い出すことを言葉にとどめ、蓄積することで、記憶を強固にし、新たな記憶を生み出すような取り組みができないか、と考え始めている。更新可能な追悼文集、とでも言えようか。一人の出版人とその記憶をめぐる語りの実践とアーカイブ、そんな新たな試みになればいいと思っている。

極めて私的な事柄に終始したが、世界に目を移せば、この一年は停戦が実現するどころか、新たな憎しみが生まれ、血が流された一層苦しい年となった。無数の命が失われてしまった。世界中にある多くの耐え難い喪失の痛み、そして我が身にとって大きい喪失を顧みて、今年のクリスマスカードの聖句はヨハネの黙示録から選んだ。最後に掲げて、今年最後の雑録の結びとしたい。

目から涙をことごとく拭い去ってくださる。もはや死もなく、悲しみも嘆きも痛みもない。最初のものが過ぎ去ったからである。(ヨハネの黙示録 21:4 聖書協会共同訳)

たなか・ゆうすけ (主任)

研究所活動 (2023年7月～2023年11月)

キリスト教研究所 1日研究会

開催日時: 2023年7月29日(土) 14:00～17:15

開催場所: 92会議室

対面参加を基本とするオンライン参加 (Zoom) の併用

発表①三野 和恵 研究所客員研究員

発表: イングランド長老教会女性宣教会宣教師ペギー・C・アーサー (Peggie C. Arthur, 1891-1959) の伝記的研究

コメント: 辻 直人 (和光大学教授、明治学院大学キリスト教研究所協力研究員)

発表② 榎木 憲一郎 研究所客員研究員

発表: 現代政治理論における「政治」と「宗教」: コミュニタリアニズムの論者たちの議論を中心に

コメント: 千葉眞 (国際基督教大学名誉教授)

2023年度アジアキリスト教講義シリーズ (秋学期)

(各回 18:40-20:10)

第6回 10/3 (火) 「現代中国の政治とキリスト教」

講師: 松谷暁介 協力研究員

第7回 10/17 (火) 「韓国現代政治史とキリスト教」

講師: 徐正敏 所員

第8回 10/24 (火) 「遠藤周作とキリスト教」

講師: 増田斎 協力研究員

第9回 10/31 (火) 「三浦綾子の夫・光世の日記から」

講師: 田中綾 (京都ノートルダム女子大学・神戸女学院大学非常勤講師)

第10回 11/7 (火) 「アジアの神学としての民衆神学」

講師: 香山洋人 (日本聖公会退職司祭、元明治学院大学非常勤講師)

キリスト教研究所主催井深梶之助公開研究シンポジウム

開催日時: 2023年9月13日(水) 14:00～16:30

開催場所: 明治学院大学白金校地 92会議室

発表者①渡辺祐子 所員

テーマ「井深梶之助のアジア観」

発表者②辻直人 協力研究員

テーマ「基督教教育同盟会会長としての井深梶之助」

発表者③植木献 所員

テーマ「文明と公会主義：英文日記にみる井深梶之助の
キリスト教理解」

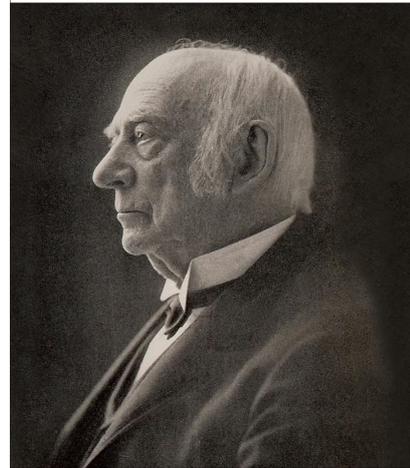
キリスト教文学・音楽研究プロジェクトワークショップ

開催日時：2023年10月23日（月）17：00～19：30

開催場所：明治学院大学白金校地 91 会議室

講師：増田斎（京都ノートルダム女子大学非常勤講師・
本研究所協力研究員）

小嶋洋輔（名桜大学教授・本研究所協力研究員）



キリスト教研究所主催公開講演会

開催日時：2023年11月17日（金）16：00～18：00

開催場所：明治学院大学白金校地 3202 教室

講師：宋軍（香港・中国神学研究院副教授・本研究所研
究員）

テーマ：「基督教中国化」への道のり—中国のキリスト教
政策について

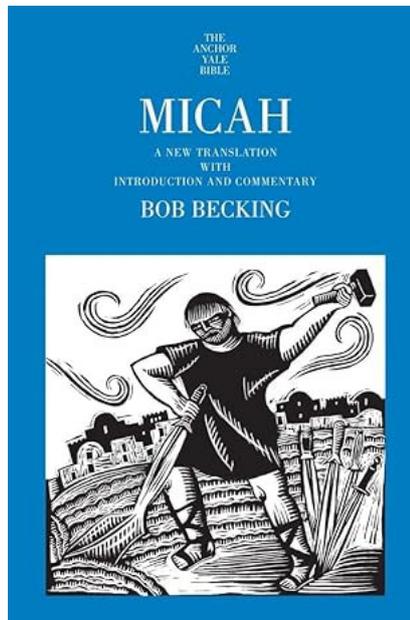
新着図書

- ・『福音と世界』No. 7、新教出版、2023。
- ・『福音と世界』No. 8、新教出版、2023。
- ・『福音と世界』No. 9、新教出版、2023。
- ・『福音と世界』No. 10、新教出版、2023。
- ・『福音と世界』No. 11、新教出版、2023。
- ・『福音と世界』No. 12、新教出版、2023。
- ・『ヘボン伝』岡部一興著、2023年。

（岡部一興先生ご寄贈）

- ・『MICAH』BOB BECKING 著、ale University Press、2023。
- ・『アウグスティヌス著作集 20/II』詩編注解(6)

河野一典・松崎一平訳、2023年。



MEMO



あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第92号

2023年12月18日 発行

明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL:03-5421-5210 / FAX:03-5421-5214
Email: kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩